命の大切さを学ぶ教室
全国作文コンクール
第8回【優秀作品集】

警察庁 犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が受ける被害は、犯罪行為そのものによって生じる心身の被害のみでなく、周囲の人々による心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難、社会からの孤立感など、その影響は広範囲かつ長期間にわたります。

犯罪被害者等が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子どもたちに、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から全国警察では、これからの社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子どもを亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を望む犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催や、大学生を対象とした被害者支援に関する社会活動への参加の促進など、「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた取組を、犯罪被害者等の御協力を得ながら、教育委員会、民間被害者支援団体等と連携して積極的に進めています。

中でも、「命の大切さを学ぶ教室」は、犯罪被害者等への理解・共感を生むとともに、規範意識の醸成にもつながっています。

「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」は、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させる取組として、警察庁が平成二十三年度から開催しているものであり、平成二十七年度からは新たに文部科学大臣賞が設けられ、「命の大切さを学ぶ教室」に参加する中学校・高校も増え、この取組の更なる広がりが期待されるところです。

本冊子は、平成三十年度の第八回全国作文コンクールにおいて、全国から応募された作品の中から選考した優秀作品をとりまとめたものです。犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

平成三十一年二月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当）内藤　浩文

目　次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・「命の大切さ」　湖南市立日枝中学校　三年　廣岡　萌菜　……2

【文部科学大臣賞】

・今を大切に　二本松市立二本松第三中学校　三年　松井　菜々美　……4

【警察庁長官賞】

・尊い命　八戸市立大館中学校　三年　森岡　亮太　……6

・明日を生きる　栗原市立志波姫中学校　三年　梅津　花帆　……8

・「理不尽な事故」　出雲市立河南中学校　三年　田中　丈　……10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・命の大切さの講話を聞いて　埼玉県立川越工業高等学校　三年　塚本　歩良　……14

【文部科学大臣賞】

・生きている意味　熊本県立大津高等学校　三年　豊住　真衣　……16

【警察庁長官賞】

・命の大切さ　聖和学園高等学校　二年　小山　海音　……18

・痛み、分からずとも　長岡工業高等専門学校　二年　細木　真歩　……20

・いのちを考えるとき　山口県立柳井商工高等学校　三年　廣戸　渚咲　……22

【中学生の部】

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

「命の大切さ」

（滋賀県）
湖南市立日枝中学校　三年　廣岡（ひろおか）　萌菜（もえな）

私は、この前学校で命の大切さを学ぶ教室を聞きました。それは同級生からの集団暴行事件によって、当時高校生だった息子さんを亡くされたお母さんのお話でした。

その中で、「人の手足が息子にとって凶器になった。」という言葉を何回もおっしゃっていました。人の役に立つことにできるはずの手足が逆に人を傷つけ苦しめるものになるなんて考えられないし、私自身はしたことがありません。でも、よく考えてみると私の場合、人の心を傷つける言葉を発する口が凶器となったことがあるかもしれないと思いました。口も手足と同様に、人を思いやり優しくかける言葉や感謝の言葉など人と人とがコミュニケーションをすることができますが、凶器になれば人の心を傷つけ悲しめる言葉へ一変してしまいます。体の傷は時間が経てば治りますが、そのときに傷つけられた心の傷は一生治ることはありません。何より恐ろしいのは、人の体や心を傷つけるのは一瞬ですが、それによって悲しみは一生続くということです。もしかすると、自分が気づいていない間に相手の心を傷つけていることがあるのかもしれません。そう考えると、ニュースなどで報道されている暴行事件やいじめはとても重大で悲惨だということを改めて感じました。

それから、今回お話してくださったお母さんは、そんなつらい思いをしたことをふり返って涙しながらもお話してくださいました。そのお母さんの涙を見たとき、被害者は暴行を受けたその人自身だけでなく、その人に今まで関わってきた方全員が被害者なのだと思いました。残された家族の気持ち、毎日

病院でお見舞いに来てくださっていた先生の気持ちはとてもつらかったと思います。今まで他人事として見てきた暴行事件やいじめによって自殺したニュース。それまでは、「かわいそうだな。」と同情しかしていなかったしどこか他人事と思っている自分もいました。でも、今回の授業を通して、同情ではなく理解していく必要があると思いました。他人事ではなく自分達の住んでいる世界で起こった出来事だと思う必要があると思いました。今回学んだ多くのことを生かし、手や足、そして口を、凶器ではなく、人の役に立つものにしていきたいです。

今回、つらい過去をふり返ってまで私達にお話してくださったのは、二度と息子さんやご家族などのようなつらい思いをする人がいなくなるようにとの願いを込められたものと思います。そのことをしっかり理解して生きていかないといけない責任を感じました。

【文部科学大臣賞】

今を大切に

（福島県）
二本松市立二本松第三中学校　三年　松井（まつい）　菜々美（ななみ）

私達は、今を大切に生きているだろうか。明日は必ず訪れると何の疑いもなく信じてはいないだろうか。「命」と聞いて何を思い浮かべるだろう。

私が思っていた命についての最初のイメージは、「私になくてはならないもの」ということだ。命がなくなれば当然死んでしまう。命は限りあるものだ。大切なもの、そう思ってはいたが、危険がすぐ側に潜んでいるとは思わず、そのためか深く考えることもなかった。

そんな私が、命に対しての考えが変わったのは、学校で行われた「命の大切さを学ぶ授業」を受講したことがきっかけだ。それは、飲酒運転のトラックによるひき逃げで、当時十九歳だった息子さんを亡くされた方の講演だった。私は、涙を浮かべ、声を詰まらせながら話をしている姿から、突然家族を犯罪によって失うことのつらさを感じ、いつの間にか涙があふれ出していた。朝、笑顔で家を出て行った家族が、もう二度と帰って来ないなんて考えられるだろうか。私だったら考えられないし、信じたくない。この事故で亡くなった方も、いつも通り出て行ったそうだ。まさか死ぬなんて考えもしなかったはずだ。この時私は、今朝の事を振り返ってみた。ちゃんと家族の顔を見て会話をしていただろうかと。もしかしたら、私も犯罪に巻き込まれ、命を落としていたかもしれないのだ。そう思ったら、突然怖くなり、体が固くなるのが分かった。この事故で遺族は、まわりから色が消え、心は空になり、動く気力もなくなってしまったそうだ。また、いまだに納骨をせず、亡くなった後も彼の食事を作り続けているという。長い年月が経っても、残された家族の

心の傷は消えない。そう思った。同時に、いつ何が起こるのか分からないという恐怖を感じた。

そこで、後悔しないためにも徹底してやろうと思うことがある。それは、毎日を大切に生きていき、感謝することだ。私は、当たり前になりすぎて感謝する心を忘れ、何気なく一日が過ぎていっている気がする。今後は、感謝の言葉を口にし、一日一日を大切にしたい。

「命の大切さを学ぶ授業」を通して、命は「私になくてはならないもの」から「みんなの思いが詰まった大切なもの」と考えるようになった。一人ひとりの命には、支えてくれる多くの人の思いが込められている。だから、そういった人達を悲しませる悲惨な犯罪が無くなってほしいと心から思う。命に対しての考えが変わり、今までより、深く考えることができたこの講演に感謝している。

何気ない毎日の中にある幸せ。その幸せを守るためにも、命を大切にしていこうと思う。私は、生きているのだから。この命を、今を、大切に生きていきたい。

【警察庁長官賞】

尊い命

（青森県）
八戸市立大館中学校　三年　森岡（もりおか）　亮太（りょうた）

友人や家族等の何気ない言葉が、その人から聞いた最後の言葉となってしまうかもしれない。そう考えると、学校へ行くのも、家に帰るのも、何もかもが怖くなってしまう。事件や事故は、いつでも誰にでも、例えどれだけ注意して生活しようと起こりうるのだ。この講演では、僕達が今こうして安全に生活できるということは、決して当たり前のことではないのだと感じさせられた。

この講演で見たドラマには、犯罪被害に遭った家族の、悲しみや苦しみを何とか乗り越えようとする姿が描かれていた。僕はニュースや新聞で殺人事件や死亡事故の記事を見ても、「犯人はひどいな。」「死んでしまった人はかわいそうだ。」「物騒な世の中だ。」程度にしか考えず、その被害がどこまで影響しているのか、考えたこともなかった。しかし、このドラマを見て、犯罪被害に遭うことがどれだけつらいのか、家族や友人の人生がどれだけ狂わされるのかを知ることができた。また、それを知ったことで、犯罪被害に遭った人に対する「頑張れ」や、「つらいのはわかるけど、死んだ人のことは忘れて切り替えよう。」という言葉がどれだけ無責任なのかも、考えることができた。

「例え被害に遭った人が笑顔でも、大切な人を失って平気なはずがありません。」全くそのとおりだと思う。何をどうしようと、死んでしまった人は戻ってこない。もうその人と会うことは二度とない。それが悲しくないなんてことがある訳がない。命とは、脆く、尊いものである。それを奪ってしまうことは決して許されることではないと、改めて感じた。

今回の講演では、直接殺害されることが犯罪被害の例としてドラマになっていたが、いじめを受けることも犯罪被害に入ると思う。今の日本には、いじめに耐え切れず自殺してしまう、ということが残念ながら起こり続けており、これからも無くなることは無いだろう。親が痛みに耐えて産み、一生懸命育ててくれた命を捨てさせることは、命を奪うことと同じである。許されることではない。また、自分の命だからといって、軽い気持ちで命を絶つことも許されない。その命にどれだけの人が関わり、どれだけの人が育ててくれたのかを考えるべきだと思う。

事件・事故は誰の身にも起こりうる。必ずしも一生安全に過ごせるとは限らない。今安全に過ごせている人は、それに感謝すべきである。僕もその一人だ。僕の身にこれから何があるかは分からないが、親から受け継いだ命を全うできるように生活していきたい。

【警察庁長官賞】

明日を生きる

（宮城県）
栗原市立志波姫中学校　三年　梅津（うめづ）　花帆（かほ）

「明日が来るのはあたりまえじゃない」ということを、私はあの日、実感した。学校で「命の大切さを学ぶ教室」が行われたのだ。

そこでは、まだ小学生だった翔樹君を登校中の交通事故で亡くしたお母さんの手記が紹介された。翔樹君が生まれた時のこと、成長の記録など、和やかな雰囲気から始まった手記だったが、事故の日を境にそれは一変した。

「どうして翔樹、帰ってきてよ。」「翔樹に会いたい。」などの悲痛な言葉が綴られ、お母さんの、現実を受け止められない、辛い気持ちが切実に記されていた。「行ってきます。」と家を出た翔樹君も、そして家族も、いつも通り「ただいま！」と家に帰ることを、あたりまえのことと信じて疑わなかったと思う。

私にとっての「あたりまえ」は、朝起きると家族がいること、学校に行って友達に会うこと、家に帰って家族に今日のできごとを話せること。でもそれらは全て、命があるからこそできることなんだと考えさせられた。そして、その「あたりまえ」はいつなくなってもおかしくないものだと知った。

現代は、私と同じくらいの年齢の人たちが、人生を悲観し、自殺するということが増えているという。自らの意志で命を絶つことを決めた人たち。思いもよらない交通事故や災害で亡くなった人たち。どの人の命も、大切な一つしかない命だ。その人がいなくなったことによって、残された家族の人生は、悲しみに満ちたものに大きく変わってしまうのだ。翔樹君のお母さんの強い思いを知ることで、自分の命が自分だけのものではないということに、私

は改めて気付かせられた。

どうして、翔樹君のお母さんは、手記を書いたのだろう。生まれたときの我が子を思い出し、その成長を振り返り、事故が起きたその日に時を戻す……それは辛く苦しい作業だったに違いない。更に、それが繰り返し語られることで、お母さんはずっと悲しみの中に立ち戻ってしまうかもしれないのに。それでもこの出来事を書き残し、世の中に発信していくことを決めた。それはきっと、翔樹君が確かに生きていたという証を残したかったからなのではないだろうか。そして、同じような事故によって悲しい思いをする人、苦しむ人をなくしたいと思ったからではないだろうか。そしてもう一つ、「明日が来るのはあたりまえじゃない」ということを、全ての人に伝えたいからなのではないかと思った。

どんなに辛い日があっても逃げずに、明日を生きるために命を大切にすること。それを私は翔樹君のお母さんの手記に教えてもらった。自分が今生きているのは奇跡なのだということを忘れず、日々の「あたりまえ」がある幸せを大切にして生きていきたい。

私が今日生きる一日は、誰かが生きたくても生きられなかった一日なのだから。

【警察庁長官賞】

「理不尽な事故」

（島根県）
出雲市立河南中学校　三年　田中（たなか）　丈（じょう）

僕は小学五年生の時、交通事故にあいました。

正月におじいちゃんが病気で入院している病院に行くため、父さん以外の僕、一つ上の兄、三つ下の弟、そして母さんの四人で雪の多い大東町の道路を車で走っていました。あと十五キロ位で着くという時、突然、母さんが大きい声を出してブレーキを踏みました。

そこから、僕の意識は飛びました。気がつくと大きい声が聞こえてきました。大人の声です。どうやら交通事故にあったらしく、隣を見てみると兄が頭からたくさんの血を流して窓にもたれかかっていました。弟は意識はあるけど口が切れていて、母さんは大人の人たちに何か話していました。そして救急車で病院に運ばれ、気がつくと病室にいました。弟はいたけど兄がいませんでした。兄は頭蓋骨が折れて血が出ていたらしく意識がもどるまで丸一日かかりました。何とか退院し、三か月位かかりましたが、普通の学校生活に戻れました。病院が近かったのと、たまたま周りの大人たちがすぐ救急車を呼んでくれたおかげだと思います。相手の車は沖縄からの旅行者で、夏用タイヤでスリップして対向車線に飛び出してきたそうです。

一度の謝罪もなく、相手を殴りたいような気持ちでいっぱいでした。

でも、今日、江角さんの話を聞いて相手を恨むより、そこからこのような事故が起きないように活動をすることが大事だと知りました。僕は相手を恨むばかりでちっとも周りのことが見えておらず、友達や人に優しくせず暴言を吐いたりしていました。

講演で命がなければ何もできないということに改

めて気づきました。僕の家族は交通事故で重傷こそ負ったけど誰一人命を落とさなかった、ならば相手を恨むんじゃなくて家族を大切にして、これから同じようなことが起きないように呼び掛けたいと思います。

今日の講演で僕は一番前にいて聞こえやすい位置だったけれども、「あたりまえ」の反対を思いつきませんでした。そして、それを言われた時、ハッとしました。

「ありがとう」という言葉は生きている間にしか言えない言葉。

ならば、それを言わずにいるのはもったいないし後悔すると思いました。

江角さんのおかげで、交通事故がトラウマだったのが、少しづつ前向きに考えることができるようになりました。

僕の先生が、いつも言いすぎなくらい「ありがとう」と言うのはそういう意味もあるんだと思いました。

「あたりまえ」を「ありがとう」に、いつまでも心に留めておきたいです。

忘れかけていた人間として一番大切な「ありがとう」を思い出させてくれてありがとうございました。

帰ったら母さんに「ありがとう」と言いたいです。

【高校生の部】

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

命の大切さの講話を聞いて

（埼玉県）
埼玉県立川越工業高等学校　三年　塚本（つかもと）　歩良（あゆら）

テレビを点けると、日々、様々なニュースが流れてゆく。その中には、事件に巻き込まれたり、交通事故などで数多くの人が命を落としている。

しかし、そんなニュースも、過ぎ去っていく日々の中で、次第に人々の記憶から消え去ってしまう。その事件、事故の裏でどれだけ深い悲しみが、悲痛な叫びがあったかなど誰も知らずに。多くの人は、そういった事件とは無縁だと思って過ごしているだろう。私もその一人だった。

だが、今回の健康講演会で佐藤咲子さんの話を聞いて、そういったことは全くの他人事ではなく、自分や周りの人達が突如に居なくなってしまってもおかしくはないのだと感じた。

佐藤さんが両親をいっぺんに亡くしたのは私たちと同じくらいの高校二年生（一五歳）の時だった。親元を離れ、遠くの学校で授業を受けている間、雑貨店を営んでいる両親を、村内の男に猟銃で殺害された。佐藤さんがそう語る中、私はどこか現実味を感じられないでいた。殺人事件の被害者になるというのは現実では起こらないものだと、平凡な日々を送る中でそう決めつけてしまっていた。だから、佐藤さんの話を正面から受け取れないでいた。

でも、涙を流しながら震えた声で当時の事を語る姿に胸が痛んだ。事件から五十年近く経った今でも、心は事件当時の十五歳のままで止まっているのだと知った。

両親を亡くした佐藤さんを、つらい現実が待ち構えていた。当時の日本は犯罪被害者を守る法律が成立しておらず、加害者のみ人権が守られ、被害者は置き去りだったそうだ。そんな不条理に悩み続け、

苦しい日々を送っていた佐藤さんの心情は計り知れない。両親を失ったショックから無気力な状態が続き、「自分も死ねばよかった。」と何度も思ったという。そんな佐藤さんを当時から、ずっと支えてきたのが二つ上のお兄さんの存在だという。兄とは今も事件のことを話すことは出来ないと語っていたが、その存在は佐藤さんの心の大きな支えになっているのが分かった。

佐藤さんは現在、犯罪被害者として講演をしている。「講演することが唯一の親孝行」と考え、遺族の叫びを訴え続けているそうだ。今回の講演を受け、初めに佐藤さんの様子を見た時、明るい人だなという印象を受けた。しかし、話を聞くうちに、その心には五十年以上ずっと深い傷を負っていて、長い年月が経った今でも、その傷は癒えていないことを知った。もしかしたら、私の周りにも、犯罪被害者でなくても、何かしら傷ついている人が居るのではないかと思った。そのような方達に、自分で何が出来るのだろうかと考えてみても、正直答えは見えてこない。

しかし、身近なところから、家族を大切にする、友達の悩みを聞いてあげる、そんな些細なことから始めてみようと思った。また、遺族の方の心情を完全に理解するのは難しいが、そういった方の心を理解しようと努力する一つのきっかけになった。

佐藤さんの講演で、普段生活していただけでは見えなかった、身近な人の存在こそが大切なのではないかと、気付かされたような気がする。

【文部科学大臣賞】

生きている意味

（熊本県）
熊本県立大津高等学校　三年　豊住（とよずみ）　真衣（まい）

「なぜ私は生まれてきたのだろう」「どうして私は生きているのだろう」このような疑問を持ったことはないだろうか。私は自分が生きている意味について疑問に思うときがある。自分がなぜ生きているのか、自分に生きている価値はあるのか、この問いを自分に何度も投げかけてみてもその答えが返ってきたことは一度もなかった。

八月、殺人事件で娘さんを亡くされた中谷さんのお話を聞いた。中谷さんは、娘を亡くした悲しみや怒り、周りの人たちの温かい対応、そしてかけがえのない命を大切にすることなどたくさんのお話をしてくださった。お話を聞いた私は大きな衝撃を受け、悲しみで胸がいっぱいになった。写真の中ににっこり笑っている歩さんには明るい未来が待っていただろう。しかしそれが叶うことはなかった。輝かし未来が待っていた何の罪もない一人の命が失われてしまったことを考えるととても心が痛んだ。私はお話を聞くだけでとてもつらい気持ちになったが、それを実際に体験された中谷さんは私の想像を遙かに超えるつらい思いをしたのだと思う。私たちに命の大切さを伝えるために人前に立って話ができるようになるまでどれほどつらく悲しい経験をされたのだろう。悲しみ、怒り、憎しみ、後悔。私が簡単に言葉にすることはできないほどのことを経験したのだろうと思う。中谷さんは「どんなに月日が経っても私の中の歩は二十歳のままです」とおっしゃっていた。心の傷は決して時間が解決してくれるものではないと感じた。周りの人の温かい支えに助けられた部分も多くあったと思う。人と人は助け合って生きているのだ。

私は中谷さんのお話の中でとても心に残った言葉がある。それはお話の最後に私たちに向けて大きな声で伝えてくださった「生まれてきてくれてありがとう」という言葉だ。私は中谷さんの話を聞くまでは自分が生きている意味をずっと疑問に思っていた。自分の生きている意味や生きている価値が分からなくなり苦しくなった。私は生まれてくるべきではなかったかもしれないと考えることさえあった。両親から授かった大切な命だと分かっていながら、明日に希望が持てず生きていることを苦痛だと感じたことさえある。そんな真っ暗な心の中に一筋の光をもたらしてくれたのは中谷さんの言葉だった。初めて「生まれてきてくれてありがとう」という言葉をかけてもらった。嬉しかった。本当に嬉しかった。まるで自分の存在全てを肯定してくれたように感じた。改めて自分の命、そして周りの人たちの命の尊さ、重さを感じた瞬間だった。私は素直に生まれてきてよかった、生きていてよかったと心から思った。

私には夢がある。それはいじめや事件、事故を経験して心に傷を負った人、自分には生きる価値がない、生きている意味がないと悩んでいる人の支えになることだ。最近、ニュースでいじめが原因で自殺したことや、悲惨な事件や事故で尊い命が失われたことを聞くことがある。私はその度に悲しみや怒りを感じていた。多くの人が心に傷を負い、生きる希望を失った人もいるだろう。私はその人たちを支えたい。人は助け合い、支えあって生きている。これは中谷さんの話の中から学んだことだ。私は今まで命の大切さを教えてもらい心を救ってもらうことが多かった。しかし、今回のお話を聞いて、私が中谷さんから言葉をかけてもらったことで救われたように次は私が命の大切さを多くの人に伝える番だと思った。私は明日生きることに希望を持てない人に声を大にして伝えたい。「生まれてきてくれてありがとう」と。かけがえのない命の大切さを理解する、そして、自分のことも周りのことも大切にし、命を守り受け継いでいく、これが私の生きている意味だ。

【警察庁長官賞】

命の大切さ

（宮城県）
聖和学園高等学校　二年　小山（おやま）　海音（まりん）

私は「命の授業」を受けて、今までの自分は命の尊さについてあまりよく分かっていなかったと感じました。

命が大切だということは分かっていたのですが、それはどこか漠然としていて、命が無ければ生きられないという程度の、当たり前のことしか分かっていませんでした。自殺をする人のことをニュースなどで見聞きしても、自分の命をどうしようが本人の自由だとさえ思っていたのです。

しかし、その考えが間違っていることに、この「命の授業」で気づかされました。命は自分だけのものではない。私を産み育ててくれる親、喧嘩をして嫌になることもたくさんあるけれど困った時にいつも助けてくれる姉、今までお世話になった先生方や友達みんなにとっても大切な命なのだということを。そして、親より先に亡くなってしまうこと以上に親不孝なことはないのだ、と。命とは、本人にとって大切なものだけれど、その人だけでなく、関わってきた人すべてにとってかけがえのないものなのだと思いました。

実はあの日、「命の授業」で、大切な弟さんを亡くされたご遺族の話を聞いて、父の亡くなった日のことを思い出しました。もちろん、父が亡くなったことを忘れていたわけではありません。大好きだった父は、今もいつも心の中に居てくれていると思っていますが、生きて傍にいないことに、私は少しずつ適応しつつあります。

私の父が亡くなったのは、私が小学四年生の時でした。突然のことで明確に覚えていないことも多いのですが、学校にいる時に急に放送で呼び出された

ことは覚えています。理由も分からないまま早退をして、姉と一緒に母が帰ってくるのを待っていると、家の電話が鳴り、電話の向こうで母が、父が亡くなったことを泣きながら告げたのでした。私は、母が何を言っているのか分かりませんでした。言葉自体は分かっていたのですが、心が頭についていけなかったのです。そのせいか、その時は全く涙が流れませんでした。あまりに突然で何も考えられなかったのだと思います。その後、母と帰ってきた父の姿を見て、急に涙が溢れて止まらなくなりました。その時は何かを思うとか何かを考えるということもできませんでした。ただ、涙が溢れるだけでした。

「命の授業」を受けて、改めてその時のことについて考えさせられました。

私は父に何かをしてあげられただろうか。…いつもしてもらうばかりで何もしてあげることはできなかったし、もう今から何かをしてあげることもできません。父はもうこの世にいない、この世にいない人には何もしてあげられない。だから命は貴重で尊いのだと痛感しました。私は父に何もしてあげられなかったけれど、その分、今生きている母や姉、周りの人たちを大切にしていきたいと思っています。

会話の中で、ちょっとしたことや冗談やふざけた軽い気持ちで「死ね」という言葉を使っているのを耳にすることがあります。でも、この世には死んでも良い人間なんていないし、誰にでも平等に生きる権利があるので、軽々しく「死ね」という言葉を口にするべきではありません。私自身も言葉に気をつけるとともに、もし周りにそのような人がいたら、話を聞いて相談に乗り、その上で、言葉や命の重さについて一緒に考えていきたいと思います。

人は必ずいつか死を迎えます。これは避けられないことです。だから、生きている時間を大切にして、死ぬまでに私ができることを考え、誰かのために力を尽くしたいと思います。自分だけでなく他の人の命も同じく大切にできる大人になりたいと考えています。

【警察庁長官賞】

痛み、分からずとも

（新潟県）
長岡工業高等専門学校　二年　細木（ほそき）　真歩（まほ）

明日、死ぬかもしれない。

そう思って生きている人は、私の周りに何人いるだろう。朝、当たり前のように笑っている家族が、夕方には、何度呼びかけても応えてくれなくなるなんて、誰が考えるのだろう。

幸福なことに私の家族は、大きな病気もケガもなく、祖父母、父母、弟妹みんな元気に生きている。だから、明日、誰かがいなくなるかもしれないなんて、考えもしなかった。

講師の方もそうだったのではないか、と思う。講師は女性で、交通事故で夫を亡くし、自身とその子どもも大きなケガを負ったという、悲しい過去を持った方だった。その口から語られる事故より前の家族の姿があまりに幸せそうで、皮肉にも、それが事の悲惨さを強調していた。

加害者は講師の大切な人の命を奪った。それは結果として、彼女の、幸せであるはずの未来と生きる喜びを奪うこととなった。加害者が殺したのは一人の人間だけではない。講師の残りの人生をも殺したのだ。

人はミスをするものであり、そして人がいつか死ぬものである限り、事故死はなくならないだろう。仕方ないとは言いたくないが、どうにもならないこともある。しかし、講師の話では、加害者は交通ルールを完璧に守っていなかったらしい。その上、事故後の謝罪も真剣さに欠けており、加害者の罰は未成年を理由に軽かったという。そこまで話した後に講師は「加害者が憎くてたまらない、殺してしまいたい」と言った。その気持ちを否定することなど、誰にもできない。

私は講演を聞き、悲しみや憤りを感じた。突然

に、理不尽に奪われる命を想った。けれどそれは、被害者の苦しみに比べたら、十分の一ほどもない僅かなものだ。現に、私はその話を聞いた後、いつも通り友人とお喋りをして笑い、家族の「おかえり」を聞き、談笑しながら食事し、ぐっすり眠った。被害者は今日だって、何年も前の事故を思い出して、食事も喉を通らず、暗い気持ちで目を閉じるのかもしれないのに。

他人事だと思っているのだ。約二年前もそうだった。中学三年の初冬、みぞれの降る薄暗い下校道に、車にはねられた老婆が倒れていた。意識はなく手足ものびていた。それが私にとって初めて「死んだ人間を見る」という経験になった。そのときの私は、恐怖や不安を感じることはあれど、目の前の死を悲しんではいなかった。何故か？他人事だったからだ。それは、私が悪いのだろうか。

自分以外の人の心の痛みなど、家族でさえ完全に理解することはできない。まして大切な人を失った悲しみは、察するに余り有る。「命は大切だ」と、私が言うのと講師が言うのとでは、重みが違いすぎる。

だからこそ、私は、今回の講演を聞くことができてよかったと思っている。想像を絶する悲哀、許せないという本音。それらに触れた上で未だ「まさか自分が、ありえない」という考えを持っている自己への気付き。これを得られたことは、今後の私の人生において大変価値のあることだと思う。思っているだけでは何も始まらないというが、思いがなければ全てはゼロだ。最初の一歩をくださった講師の方をはじめとする人々に感謝したい。

命は大切だ。きっと皆、そんなことは分かっていると言うだろう。分かっていて、どこか他人事なのだ。それはある意味、幸せなことなのかもしれない。しかし、その他人事だという意識が事故を生んだ。帰らぬ人と、その周りの人の悲しみを生んだ。ミスはある。でも、防げたかもしれないことで尊い命が奪われるのは、あまりに無念だ。だから私たちは、当たり前だと笑われても「命は大切だ」と言い続けることを、やめてはならない。

【警察庁長官賞】

いのちを考えるとき

（山口県）
山口県立柳井商工高等学校　三年　廣戸（ひろと）　渚咲（なぎさ）

日々過ぎていく時間を特に意識することもなく、私は毎日を過ごしています。学校に行き、授業を受け、部活をし、普通に流れていく時間は当たり前のようにあるものだと思っていました。そんな時、私はある講演を聴く機会をいただきました。そこでのお話は、自分の体験と重なるところもあり、大切なことに気づくきっかけとなったのです。

講演の演題は「戻らない過去、消えない心の傷」で、講師は木村緑さんという女性でした。ある日、突然交通事故で我が子を失うというつらい体験をお話しされ、私は胸がしめつけられるほどの思いになりました。未だにやりきれない悲しみや苦しみを抱えながら、でも生かされている自分の命を大切にし、前向きに生きようとされている木村さんの姿は、私にいろいろなことを教えてくださいました。自分にとってかけがえのない大切な存在がこの世からいなくなるということ、この辛さは当事者にしかわからないと思います。

私の家族は、両親と兄と私の四人家族でした。幼い頃から私は父が大好きで、父と二人きりで外出することも多くありました。私が小学四年生の時、父は体調が悪くなり、入退院を繰り返すようになりました。詳しいことは聞かされておらず、事情がわからない中で時間は流れていきましたが、お見舞いに行くたびにみるみる痩せていく父の姿を目の当たりにして、とても辛かったのを覚えています。母は、病院と仕事場と家との行き来で忙しそうで疲れているようにも見えました。いつまでこんな生活が続くのだろうと不安な気持ちでいっぱいでした。日に日に弱っていく父と、ある日話をしていると、父は私

にこんな言葉を言いました。

「俺も頑張るから、お前も頑張れよ。」

突然のことだったので返事に困りましたが、病に立ち向かい、痛みや苦しみと闘いながらも掛けてくれたこの言葉は、私の心に深く残っています。今思えば、自分のことで精一杯な状態なのに、これから先の私のことを心配し、いつまでも見守っているからねという温かいエールだったのでしょう。

一年近くに及ぶ闘病の末、父は静かに息を引きとりました。膵臓がんでした。体調がすぐれず、病院に行った時にはもう手術が出来ない状態で、余命を医師から告げられたそうです。父の死に立ち会ったとき、私は一生分の涙を流したと思います。

父が亡くなって、私は学校をしばらく休みました。深い悲しみで気持ちの整理がつかず、学校に行くことが出来なかったからです。でも、そんな時、私を救ってくれた存在がありました。毎日手紙を書いて家のポストに入れてくれた友達です。手紙を読んで少しずつ元気が出て、また元の生活に戻ることができたのです。一週間ぶりに学校に行くと、たくさんの友達や先生方が、「おかえり」と言って温かく迎えてくれました。その言葉に励まされ、久しぶりに笑顔になれた自分がいました。

父が亡くなってから五年が経ちますが、最近ふと父との会話を思い出します。もう二度と会って話ができないという現実を受け入れるのはとても辛いですが、それでも残された家族は前を向いて、今を生きていかなければなりません。

私は今、一日一日がとても充実しています。来年は最上級生になり、高校卒業後は地元に就職したいと考えています。そして、これまで支えてくれた家族や周りの人たちに、何かの形で恩返しできればと思っています。いつもの日常がそこにあり、何事もなく時間が流れていくこと、それは決して当たり前のことではなく、とても幸せなことです。感謝の気持ちを持ち、生かされたこの命を大切にして、一日一日をしっかりと生きていきたいと思います。